



Red Hat Directory Server 11

リリースノート

Red Hat Directory Server 11 (11.9) に関連する注目すべき機能と更新

Red Hat Directory Server 11 リリースノート

Red Hat Directory Server 11 (11.9) に関連する注目すべき機能と更新

法律上の通知

Copyright © 2024 Red Hat, Inc.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux[®] is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java[®] is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS[®] is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL[®] is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js[®] is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack[®] Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

本リリースノートでは、Red Hat Directory Server 11 での改良点および実装された追加機能の概要、本リリースにおける既知の問題などを説明します。また、重要なバグ修正、テクニカルプレビュー、非推奨の機能などの詳細も説明します。

目次

多様性を受け入れるオープンソースの強化	4
第1章 全般情報	5
1.1. DIRECTORY SERVER のサポートポリシーとライフサイクル	5
1.2. システム要件	5
1.3. ソフトウェアの競合	7
1.4. DIRECTORY SERVER 11 への移行に関する注意事項	7
第2章 RED HAT DIRECTORY SERVER 11.9	9
2.1. 重要な更新および新機能	9
2.2. バグ修正	9
2.3. 既知の問題	10
第3章 RED HAT DIRECTORY SERVER 11.8	12
3.1. 重要な更新および新機能	12
3.2. バグ修正	12
3.3. 既知の問題	13
第4章 RED HAT DIRECTORY SERVER 11.7	16
4.1. 重要な更新および新機能	16
4.2. バグ修正	16
4.3. 既知の問題	16
第5章 RED HAT DIRECTORY SERVER 11.6	19
5.1. 主な更新と新機能	19
5.2. 既知の問題	19
第6章 RED HAT DIRECTORY SERVER 11.5	21
6.1. 主な更新と新機能	21
6.2. テクノロジープレビュー	21
6.3. 既知の問題	21
第7章 RED HAT DIRECTORY SERVER 11.4	23
7.1. 主な更新と新機能	23
7.2. バグ修正	23
7.3. 既知の問題	24
第8章 RED HAT DIRECTORY SERVER 11.3	25
8.1. 主な更新と新機能	25
8.2. バグ修正	25
8.3. 既知の問題	26
第9章 RED HAT DIRECTORY SERVER 11.2	27
9.1. 主な更新と新機能	27
9.2. バグ修正	27
9.3. 既知の問題	27
第10章 RED HAT DIRECTORY SERVER 11.1	29
10.1. 主な更新と新機能	29
10.2. バグ修正	29
10.3. 既知の問題	29
10.4. 削除された機能	30
第11章 RED HAT DIRECTORY SERVER 11.0	31

11.1. 主な更新と新機能	31
11.2. 既知の問題	32

多様性を受け入れるオープンソースの強化

Red Hat では、コード、ドキュメント、Web プロパティにおける配慮に欠ける用語の置き換えに取り組んでいます。まずは、マスター (master)、スレーブ (slave)、ブラックリスト (blacklist)、ホワイトリスト (whitelist) の 4 つの用語の置き換えから始めます。この取り組みは膨大な作業を要するため、用語の置き換えは、今後の複数のリリースにわたって段階的に実施されます。詳細は、[Red Hat CTO である Chris Wright のメッセージ](#) をご覧ください。

第1章 全般情報

この章では、マイナーバージョンに関係なく、Red Hat Directory Server 11 に関する一般的な情報について説明します。

1.1. DIRECTORY SERVER のサポートポリシーとライフサイクル

詳細は [Red Hat Directory Server のエラーサポートポリシー](#) を参照してください。

1.2. システム要件

1.2.1. 一般的なハードウェア要件

ハードウェア要件は、次の前提条件で実行されたテストに基づいています。

- サーバーはデフォルトのインデックスを使用します。
- 各 LDAP エントリーのサイズは 1.5 KB で、30 以上の属性があります。

1.2.1.1. ディスク領域

次の表に、エントリー数に基づいた Directory Server の推奨ディスク容量のガイドラインを示します。

表1.1 必要なディスク容量

エントリー数	データベースのサイズ	データベースキャッシュ	サーバーとログ	総ディスク容量
10,000 - 500,000	2 GB	2 GB	4 GB	8 GB
500,000 - 1,000,000	5 GB	2 GB	4 GB	11 GB
1,000,000 - 5,000,000	21 GB	2 GB	4 GB	27 GB
5,000,000 - 10,000,000	42 GB	2 GB	4 GB	48 GB

総ディスク容量には、バックアップおよびレプリケーションメタデータ用の容量は含まれません。レプリケーションを有効にすると、そのメタデータは合計ディスク容量の最大 10% を必要とする場合があります。

100 万の変更があるレプリケーション changelog では、合計ディスク容量要件に少なくとも 315 MB が追加される可能性があります。

`/dev/shm/` にマウントされた一時ファイルシステム (tmpfs) には、RHDS 一時ファイルを格納するために少なくとも 4 GB の空き容量が必要です。

1.2.1.2. 必要な RAM

データベース全体をキャッシュに保持するのに十分な RAM がシステムにあることを確認してください。サーバーの設定と使用パターンによっては、必要な RAM サイズが推奨サイズよりも大きくなる場合があります。

表1.2 必要な RAM サイズ

エントリー数	エントリーキャッシュ	レプリケーション付きエントリーキャッシュ [a]	データベースキャッシュ	DN キャッシュ	NDN キャッシュ	合計 RAM サイズ [b]
10,000 - 500,000	4 GB	5 GB	1.5 GB	45 MB	160 MB	7 GB
500,000 - 1,000,000	8 GB	10 GB	1.5 GB	90 MB	320 MB	12 GB
1,000,000 - 5,000,000	40 GB	50 GB	1.5 GB	450 MB	1.6 GB	54 GB
5,000,000 - 10,000,000	80 GB	100 GB	1.5 GB	900 MB	3.2 GB	106 GB

[a] レプリケーション付きエントリーキャッシュには、エントリーのレプリケーション状態とメタデータが含まれます。

[b] 合計 RAM サイズは、レプリケーションが有効になっていることを前提としています。

1.2.2. ソフトウェア要件

Directory Server パッケージ、Web コンソール、および Windows 同期に必要なプラットフォームについて説明します。

1.2.2.1. Directory Server でサポートされるプラットフォーム

Red Hat は、次のプラットフォームで実行される Directory Server をサポートします。

- Red Hat Enterprise Linux 8.10 上で実行される Directory Server 11.9。
- Red Hat Enterprise Linux 8.9 上で実行される Directory Server 11.8。
- Red Hat Enterprise Linux 8.8 上で実行される Directory Server 11.7。
- Red Hat Enterprise Linux 8.7 上で実行される Directory Server 11.6。
- Red Hat Enterprise Linux 8.6 上で実行される Directory Server 11.5。
- Red Hat Enterprise Linux 8.5 上で実行される Directory Server 11.4。
- Red Hat Enterprise Linux 8.4 上で実行される Directory Server 11.3。
- Red Hat Enterprise Linux 8.3 上で実行される Directory Server 11.2。

- Red Hat Enterprise Linux 8.2 上で実行される Directory Server 11.1。
- Red Hat Enterprise Linux 8.1 上で実行される Directory Server 11.0。
- Red Hat Enterprise Linux は、AMD および Intel 64 ビットアーキテクチャー向けに構築されています。
- 認定済みのハイパーバイザー上の Red Hat Enterprise Linux 仮想ゲスト。詳細は、ナレッジベースソリューション [Red Hat Enterprise Linux の実行が認定されているハイパーバイザー](#) を参照してください。

1.2.2.2. Web コンソールの Directory Server ユーザーインターフェイスでサポートされているプラットフォーム

Red Hat は、以下の環境の Web コンソールでブラウザベースの Directory Server ユーザーインターフェイスをサポートします。

オペレーティングシステム	ブラウザ
Red Hat Enterprise Linux 9.X	<ul style="list-style-type: none"> ● Mozilla Firefox 115 以降 ● Chrome 88 以降
Windows Server 2016 および 2019	<ul style="list-style-type: none"> ● Mozilla Firefox 115 以降 ● Chrome 88 以降
Windows 10、11	<ul style="list-style-type: none"> ● Mozilla Firefox 115 以降 ● Microsoft Edge 88 以降 ● Chrome 88 以降

1.2.2.3. Windows Synchronization ユーティリティーでサポートされるプラットフォーム

Red Hat は、以下で実行される Active Directory 用の Windows 同期ユーティリティーをサポートしています。

- Microsoft Windows Server 2019
- Microsoft Windows Server 2016

1.3. ソフトウェアの競合

Directory Server は、Red Hat Enterprise Linux アイデンティティ管理 (IdM) サーバーがインストールされているシステムにはインストールできません。同様に、Directory Server インスタンスを持つシステムには Red Hat Enterprise Linux IdM サーバーをインストールできません。

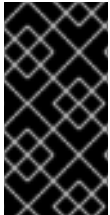
1.4. DIRECTORY SERVER 11 への移行に関する注意事項

既存の Directory Server 10 環境を Directory Server 11 に移行する場合は、次の情報を考慮してください。

Directory Server 11 コマンドラインユーティリティーの使用

Directory Server 11 には、サーバーインスタンスおよびユーザーを管理するための新しいコマンドラインユーティリティーが用意されています。これらのユーティリティーは、Directory Server 10 およびそれ以前のバージョンで管理タスクに使用される Perl スクリプトに代わるものです。

以前のバージョンのコマンドと、Directory Server 11 における代替コマンドは、[Red Hat Directory Server インストールガイド](#)の付録 [Red Hat Directory Server 11 で置き換えられたコマンドラインユーティリティー](#) を参照してください。



重要

Directory Server 10 以前のバージョンの管理タスクに使用される Perl スクリプトは、**389-ds-base-legacy-tools** パッケージで引き続き利用できます。ただし、Red Hat は、新しいコマンドラインユーティリティーの **dsconf**、**dsctl**、**dscreate**、および **dsidm** のみをサポートします。

Directory Server 11 のデフォルトのパスワード保存スキームが **PBKDF2-SHA512** に変更されました。

Directory Server 11 は、デフォルトのパスワードストレージスキームとして **PBKDF2-SHA512** スキームを使用します。これは、**SSHA**、**SSHA512**、およびその他のスキームよりも安全です。したがって、**freeradius** などの一部のアプリケーションが **PBKDF2-SHA512** スキームをサポートしておらず、強度の弱いパスワード保存スキームを設定し直す必要がある場合は、アプリケーションがユーザーエントリーを追加または変更したときだけでなく、バインド操作が成功したときも、Directory Server がユーザーパスワードを更新する点に注意してください。ただし、**cn=config** エントリーの **nsslapd-enable-upgrade-hash** パラメーターを **off** に設定すると、バインド操作で更新を無効にできます。

移行手順

Directory Server 10 を Directory Server 11 に移行する手順は、[Red Hat Directory Server インストールガイド](#) の該当する章を参照してください。

第2章 RED HAT DIRECTORY SERVER 11.9

Directory Server 11.9 に実装された新しい更新と新機能、バグ修正、既知の問題について説明します。

2.1. 重要な更新および新機能

Directory Server 11.9 の新機能と重要な更新について説明します。

ディレクトリーサーバーがバージョン 1.4.3.39 にリベース
389-ds-base パッケージがアップストリームバージョン 1.4.3.39 にアップグレードされました。

389-ds-base パッケージの重要な更新と新機能

389-ds-base パッケージに含まれる Red Hat Directory Server の機能は、Red Hat Enterprise Linux 8.10 リリースノートに記載されています。

- [HAProxy プロトコル](#)が **389-ds-base** パッケージでサポートされるようになる

2.2. バグ修正

Red Hat Directory Server 11.9 で修正された、ユーザーに重大な影響を与えるバグについて説明します。

ディレクトリーサーバーの **Web** コンソールでは、**LDAP** ブラウザー でバイナリー属性を持つエントリーを表示しようとしても例外が表示されなくなりました。

以前は、LDAP エントリーに **jpegPhoto** や **userCertificate** などのバイナリー属性が含まれている場合、**LDAP** ブラウザー でエントリーの詳細を表示しようとする、Web コンソールに例外が表示されていました。この更新により、Web コンソールはバイナリー属性を持つエントリーを正しく処理し、例外は表示されなくなりました。

(BZ#2239787)

ディレクトリーサーバーの **Web** コンソールでは、**attributeTypes** が追加されても属性名が小文字に変更されなくなりました。

以前は、Web コンソールを使用してオブジェクトクラスに属性を追加すると、属性名の大文字が小文字に変更されていました。この更新により、属性名の大文字と小文字は変更されなくなりました。

(BZ#2257790)

ns-slapd バイナリーはスレッドセーフな **libldap_r** ライブラリーとリンクされるようになり、セグメンテーション違反が発生しなくなりました。

アップストリームのビルドシステム変更により、スレッドセーフな **libldap_r** ではなく、スレッドセーフでない **libldap** ライブラリーに **ns-slapd** バイナリーがリンクされるようになり、リグレーションが発生しました。その結果、**ns-slapd** プロセスがセグメンテーションエラーで失敗する可能性があります。この更新では、ビルドシステムコードの問題が修正され、**ns-slapd** バイナリーがスレッドセーフな **libldap_r** ライブラリーにリンクされるようになりました。その結果、セグメンテーション違反が発生しなくなります。

(BZ#2264534)

Directory Server はエントリーキャッシュをフラッシュする頻度を減らしている

以前は、必要ない場合でも **Directory Server** がエントリーキャッシュをフラッシュしていました。その結果、特定の状況で **Directory Server** が応答しなくなり、パフォーマンスが低下しました。この更新により、**Directory Server** は必要な場合にのみエントリーキャッシュをフラッシュするようになりました。

(2268177)

389-ds-base パッケージのバグ修正

389-ds-base パッケージに含まれている Red Hat Directory Server のバグ修正は、Red Hat Enterprise Linux 8.10 リリースノートに記載されています。

- **dirsrv** ファイルの SELinux ラベル付けが DEBUG ログレベルに移動する
- バックエンドが関連する接尾辞なしで設定されている場合に、Directory Server がセグメンテーション違反を引き起こさなくなる
- ページ結果検索を中止した後に Directory Server が失敗しなくなる
- 接続テーブルのサイズにカスタム値を設定した場合は、アップグレード後に Directory Server が正しく起動するようになる
- コンテンツ同期プラグインが動的に有効化されても Directory Server が失敗しなくなる

2.3. 既知の問題

Directory Server 11.9 の既知の問題と、該当する場合は回避策について説明します。

FIPS モードでの **Directory Server** のインストール時にアクセスログにエラーメッセージが表示されます。

FIPS モードで Directory Server をインストールすると、アクセスログファイルに次のエラーメッセージが表示されます。

```
[time_stamp]
- WARN - slapd_do_all_nss_ssl_init - ERROR: TLS is not enabled, and the
machine is in FIPS mode. Some functionality won't work correctly (for
example, users with PBKDF2_SHA256 password scheme won't be able to log
in). It's highly advisable to enable TLS on this instance.
```

このような動作が発生するのは、Directory Server により、まず、TLS が初期化されていないことが検出され、エラーメッセージが記録されるためです。ただし、後で **dscreate** ユーティリティーが TLS の初期化を完了し、セキュリティを有効にすると、エラーメッセージは表示されなくなります。

(BZ#2153668)

Directory Server Web コンソールは、**Web** コンソール外で変更された設定を自動的に更新しません。

Red Hat Enterprise Linux 8 Web コンソールの Directory Server モジュールの設計により、コンソールのウィンドウの外側で設定を変更しても、Web コンソールには自動的に最新の設定が表示されません。たとえば、Web コンソールが開いている間にコマンドラインを使用して設定を変更すると、Web コンソールで新しい設定が自動的に更新されません。これは、別のコンピューターの Web コンソールを使用して設定を変更する場合でも当てはまります。この問題を回避するには、コンソールのウィンドウ外側で設定が変更された場合は、ブラウザで Web コンソールを手動で更新します。

(BZ#1654281)

dsconf ユーティリティーが変更ログを圧縮しない

現在、**dsconf** ユーティリティーは、**dsconf backend compact-db --only-changelog** コマンドを実行してもレプリケーション変更ログを圧縮しません。

この問題を回避するには、**COMPACT_CL5** タスクを手動で実行します。

```
$ ldapmodify -x -D "cn=Directory Manager" -W -H ldap://server.example.com
```

```
dn: cn=replica,cn=suffix_name,cn=mapping tree,cn=config
changetype: modify
replace: nsds5task
nsds5task: COMPACT_CL5
```

```
modifying entry "cn=replica,cn=suffix_name,cn=mapping tree,cn=config"
```

(BZ#2245042)

Directory Server で接尾辞の referral の設定に失敗する

Directory Server でバックエンド参照を設定すると、**dsconf <instance_name> backend suffix set --state referral** コマンドを使用したバックエンドの状態設定に失敗し、次のエラーが表示されます。

```
Error: 103 - 9 - 53 - Server is unwilling to perform - [] - need to set nsslapd-referral before moving to referral state
```

これにより、接尾辞の参照の設定に失敗します。この問題を回避するには、以下のコマンドを実行します。

1. **nsslapd-referral** パラメーターを手動で設定します。

```
# ldapmodify -D "cn=Directory Manager" -W -H ldap://server.example.com
```

```
dn: cn=dc\3Dexample\2Cdc\3Dcom,cn=mapping tree,cn=config
changetype: modify
add: nsslapd-referral
nsslapd-referral: ldap://remote_server:389/dc=example,dc=com
```

2. バックエンド状態を設定します。

```
# dsconf <instance_name> backend suffix set --state referral
```

その結果、回避策により、接尾辞の参照を設定できます。

(BZ#2063033)

第3章 RED HAT DIRECTORY SERVER 11.8

Directory Server 11.8 に実装された新しい更新と新機能、既知の問題、および非推奨の機能について説明します。

3.1. 重要な更新および新機能

Directory Server 11.8 の新機能と重要な更新について説明します。

ディレクトリーサーバーがバージョン 1.4.3.37 にリベース
389-ds-base パッケージはアップストリームバージョン 1.4.3.37 にアップグレードされました。

389-ds-base パッケージの重要な更新と新機能

389-ds-base パッケージに含まれる Red Hat Directory Server の機能は、Red Hat Enterprise Linux 8.9 リリースノートに記載されています。

- 新しい **passwordAdminSkipInfoUpdate: on/off** 設定オプションが利用可能になる

3.2. バグ修正

Red Hat Directory Server 11.8 で修正された、ユーザーに重大な影響を与えるバグについて説明します。

Directory Server は、接尾辞が定義されている場合にのみバックエンド接尾辞を使用する以前は、バックエンド設定エントリが接尾辞に関連付けられていない場合、サーバーが起動時に失敗していました。この更新により、**Directory Server** は、接尾辞が定義されている場合にのみバックエンドの接尾辞を使用します。その結果、サーバーが起動時に失敗しなくなりました。

(BZ#2246307)

OS のアップグレード後に **Directory Server** が失敗しなくなる

以前は、**nsslapd-conntablesizesize** が `/etc/dirsrv/slapd-instance_name/dse.ldif` ファイルに存在する場合、オペレーティングシステム (OS) のアップグレード後に **Directory Server** の起動に失敗していました。そのため、サーバーを起動する前に、**dse.ldif** ファイルから **nsslapd-conntablesizesize** 設定を削除する必要があります。この更新により、接続テーブルサイズのカスタム設定が期待どおりに機能し、**Directory Server** が起動時に失敗しなくなりました。

(BZ#2245946)

RHDS ヘルスチェックは、接尾辞が正しく定義されている場合に誤解を招くメッセージを報告しなくなる

以前は、**nsslapd-backend** 属性と **nsslapd-directory** 属性に大文字と小文字が混在する接尾辞を定義した場合、接尾辞が正しく定義されているにもかかわらず、**dsctl healthcheck** コマンドによって誤解を招くエラーメッセージが報告されることがありました。この更新により、**dsctl healthcheck** コマンドは、大文字と小文字の両方または大文字を使用して定義された接尾辞に関するエラーメッセージを報告しなくなりました。

(BZ#2215296)

cockpit-389-ds パッケージのアップグレードにより、**389-ds-base** および **python3-lib389** パッケージが更新されるように

以前は、**cockpit-389-ds** パッケージは、**389-ds-base** パッケージのバージョンを指定していませんでした。その結果、**cockpit-389-ds** パッケージをアップグレードするだけでは **389-ds-base** および **python3-lib389** パッケージが更新されず、パッケージ間の不整合や互換性の問題が発生する可能性があります。この更新により、**cockpit-389-ds** パッケージは **389-ds-base** および **python3-lib389** パッケージをアップグレードします。

(BZ#22245690)

ds-replcheck は RUV データを取得するようになりました

以前は、レプリカ設定エントリーを直接検索すると RUV データが表示されるにもかかわらず、**ds-replcheck** ツールは、サプライヤーにレプリカ更新ベクトル (RUV) エントリーがないというエラーを報告していました。この更新により、**ds-replcheck** ツールは、レプリケーションが完全に初期化されていないかどうかを示すレプリケーション状態を提供するようになりました。

(BZ#2211690)

ns-slapd プロセスは、**upgradednformat** コマンドを実行しても失敗しなくなりました。

以前は、**upgradednformat** コマンドを使用して DN 形式をアップグレードすると、**upgradednformat** コマンドが失敗し、ディスク領域の問題が発生していました。この更新により、**upgradednformat** が期待どおり動作するようになりました。

(BZ#2172258)

RHDS Web コンソールでエクスポートする接尾辞を選択できるようになる

以前は、**Database → Backups & LDIFs → LDIFs → Create LDIF** でエクスポートする接尾辞を選択しようとすると、ドロップダウンリストの最初の接尾辞しか使用できませんでした。この更新により、エクスポートする接尾辞を選択できるようになりました。

(BZ#2219559)

Directory Server レプリケーションマネージャーアカウントのパスワード変更が正しく機能するようになりました

以前は、パスワード変更後、Directory Server はレプリケーションアグリーメントのパスワードキャッシュを適切に更新していませんでした。その結果、レプリケーションマネージャーアカウントのパスワードを変更すると、レプリケーションが失敗しました。この更新により、Directory Server はキャッシュを適切に更新し、その結果、レプリケーションが期待どおりに機能するようになりました。

(BZ#2101473)

389-ds-base パッケージのバグ修正

389-ds-base パッケージに含まれている Red Hat Directory Server のバグ修正は、Red Hat Enterprise Linux 8.9 リリースノートに記載されています。

- **Directory Server** でセキュリティーパラメーターの変更が正しく機能するようになる
- **Directory Server** が、開いている記述子の最大数に基づいて **dtablesiz**e を計算するようになる
- **dsctl healthcheck** コマンドがデフォルトでパスワード保存スキーム **PBKDF2-SHA512** を使用するようになる
- 通常のユーザーによるページ検索はパフォーマンスに影響を与えなくなる
- **Directory Server** で暗号を期待どおりに有効または無効にできるようになる

3.3. 既知の問題

Directory Server 11.8 の既知の問題と、該当する場合は回避策について説明します。

FIPS モードでの **Directory Server** のインストール時にアクセスログにエラーメッセージが表示されます。

FIPS モードで Directory Server をインストールすると、アクセスログファイルに次のエラーメッセージが表示されます。

```
[time_stamp]
```

```
- WARN - slapd_do_all_nss_ssl_init - ERROR: TLS is not enabled, and the
machine is in FIPS mode. Some functionality won't work correctly (for
example, users with PBKDF2_SHA256 password scheme won't be able to log
in). It's highly advisable to enable TLS on this instance.
```

このような動作が発生するのは、Directory Server により、まず、TLS が初期化されていないことが検出され、エラーメッセージが記録されるためです。ただし、後で **dscreate** ユーティリティーが TLS の初期化を完了し、セキュリティーを有効にすると、エラーメッセージは表示されなくなります。

(BZ#2153668)

Directory Server Web コンソールは、**Web** コンソール外で変更された設定を自動的に更新しません。

Red Hat Enterprise Linux 8 Web コンソールの Directory Server モジュールの設計により、ユーザーがコンソールのウィンドウの外部で設定を変更しても、Web コンソールには自動的に最新の設定が表示されません。たとえば、Web コンソールが開いている間にコマンドラインを使用して設定を変更すると、Web コンソールで新しい設定が自動的に更新されません。これは、別のコンピューターの Web コンソールを使用して設定を変更する場合でも当てはまります。この問題を回避するには、コンソールのウィンドウ外部で設定が変更された場合は、ブラウザで Web コンソールを手動で更新します。

(BZ#1654281)

dsconf ユーティリティーが変更ログを圧縮しない

現在、**dsconf** ユーティリティーは、**dsconf backend compact-db --only-changelog** コマンドを実行してもレプリケーション変更ログを圧縮しません。

この問題を回避するには、**COMPACT_CL5** タスクを手動で実行します。

```
$ ldapmodify -x -D "cn=Directory Manager" -W -H ldap://server.example.com
```

```
dn: cn=replica,cn=suffix_name,cn=mapping tree,cn=config
changetype: modify
replace: nsds5task
nsds5task: COMPACT_CL5
```

```
modifying entry "cn=replica,cn=suffix_name,cn=mapping tree,cn=config"
```

(BZ#2245042)

Directory Server で接尾辞の **referral** の設定に失敗する

Directory Server でバックエンド参照を設定すると、**dsconf <instance_name> backend suffix set --state referral** コマンドを使用したバックエンドの状態設定に失敗し、次のエラーが表示されます。

```
Error: 103 - 9 - 53 - Server is unwilling to perform - [] - need to set nsslapd-referral before moving to
referral state
```

これにより、接尾辞の参照の設定に失敗します。この問題を回避するには、以下のコマンドを実行します。

1. **nsslapd-referral** パラメーターを手動で設定します。

```
# ldapmodify -D "cn=Directory Manager" -W -H ldap://server.example.com
```

```
dn: cn=dc\3Dexample\2Cdc\3Dcom,cn=mapping tree,cn=config
```

```
changetype: modify
add: nsslapd-referral
nsslapd-referral: ldap://remote_server:389/dc=example,dc=com
```

2. バックエンド状態を設定します。

```
# dsconf <instance_name> backend suffix set --state referral
```

その結果、回避策により、接尾辞の参照を設定できます。

(BZ#2063033)

第4章 RED HAT DIRECTORY SERVER 11.7

新しいシステム要件、更新と新機能、既知の問題、Directory Server 11.7 に実装された非推奨の機能について説明します。

4.1. 重要な更新および新機能

Directory Server 11.7 の新機能と重要な更新について説明します。

Directory Server がバージョン 1.4.3.34 にリベース
389-ds-base パッケージはアップストリームバージョン 1.4.3.34 にアップグレードされました。

389-ds-base パッケージの重要な更新と新機能

389-ds-base パッケージに含まれる Red Hat Directory Server の機能は、Red Hat Enterprise Linux 8.8 リリースノートに記載されています。

- Directory Server 監査ログ用の新しい **nsslapd-auditlog-display-attrs** 設定パラメーター
- Directory Server が TLS の ECDSA 秘密キーをサポートするようになりました。
- 新しい **pamModuleIsThreadSafe** 設定オプションが利用可能になりました

4.2. バグ修正

Red Hat Directory Server 11.7 で修正された、ユーザーに重大な影響を与えるバグについて説明します。

ns-slapd バイナリーはスレッドセーフな **libldap_r** ライブラリーとリンクされるようになり、セグメンテーション違反が発生しなくなりました。

アップストリームのビルドシステム変更により、スレッドセーフな **libldap_r** ではなく、スレッドセーフでない **libldap** ライブラリーに **ns-slapd** バイナリーがリンクされるようになり、リグレーションが発生しました。その結果、**ns-slapd** プロセスがセグメンテーションエラーで失敗する可能性があります。この更新では、ビルドシステムコードの問題が修正され、**ns-slapd** バイナリーがスレッドセーフな **libldap_r** ライブラリーにリンクされるようになりました。その結果、セグメンテーション違反が発生しなくなります。

(BZ#2268138)

Directory Server はエントリーキャッシュをフラッシュする頻度を減らしている

以前は、必要ない場合でも Directory Server がエントリーキャッシュをフラッシュしていました。その結果、特定の状況で Directory Server が応答しなくなり、パフォーマンスが低下しました。この更新により、Directory Server は必要な場合にのみエントリーキャッシュをフラッシュするようになりました。

(BZ#2268136)

389-ds-base パッケージのバグ修正

389-ds-base パッケージに含まれている Red Hat Directory Server のバグ修正は、Red Hat Enterprise Linux 8.8 リリースノートに記載されています。

- 変更ログの圧縮をスケジュールした時間が正しく機能するようになりました

4.3. 既知の問題

Directory Server 11.7 の既知の問題と、該当する場合は回避策について説明します。

FIPS モードでの Directory Server のインストール時にアクセスログにエラーメッセージが表示されます。

FIPS モードで Directory Server をインストールすると、アクセスログファイルに次のエラーメッセージが表示されます。

```
[time_stamp]
- WARN - slapd_do_all_nss_ssl_init - ERROR: TLS is not enabled, and the
machine is in FIPS mode. Some functionality won't work correctly (for
example, users with PBKDF2_SHA256 password scheme won't be able to log
in). It's highly advisable to enable TLS on this instance.
```

このような動作が発生するのは、Directory Server により、まず、TLS が初期化されていないことが検出され、エラーメッセージが記録されるためです。ただし、後で **dscreate** ユーティリティーが TLS の初期化を完了し、セキュリティを有効にすると、エラーメッセージは表示されなくなります。

(BZ#2153668)

Web コンソールのウィンドウ外部で変更された Directory Server の設定が自動的に表示されない

Red Hat Enterprise Linux 8 Web コンソールの Directory Server モジュールの設計により、ユーザーがコンソールのウィンドウの外部で設定を変更しても、Web コンソールには自動的に最新の設定が表示されません。たとえば、Web コンソールが開いている間にコマンドラインを使用して設定を変更すると、Web コンソールで新しい設定が自動的に更新されません。これは、別のコンピューターの Web コンソールを使用して設定を変更する場合でも当てはまります。この問題を回避するには、コンソールのウィンドウ外部で設定が変更された場合は、ブラウザで Web コンソールを手動で更新します。

(BZ#1654281)

Directory Server で接尾辞の **referral** の設定に失敗する。

Directory Server でバックエンド参照を設定すると、**dsconf <instance_name> backend suffix set --state referral** コマンドを使用したバックエンドの状態設定に失敗し、次のエラーが表示されます。

```
Error: 103 - 9 - 53 - Server is unwilling to perform - [] - need to set nsslapd-referral before moving to
referral state
```

これにより、接尾辞の参照の設定に失敗します。この問題を回避するには、以下のコマンドを実行します。

1. **nsslapd-referral** パラメーターを手動で設定します。

```
# ldapmodify -D "cn=Directory Manager" -W -H ldap://server.example.com

dn: cn=dc\3Dexample\2Cdc\3Dcom,cn=mapping tree,cn=config
changetype: modify
add: nsslapd-referral
nsslapd-referral: ldap://remote_server:389/dc=example,dc=com
```

2. バックエンド状態を設定します。

```
# dsconf <instance_name> backend suffix set --state referral
```

その結果、回避策により、接尾辞の参照を設定できます。

(BZ#2063033)

レプリケーションマネージャーアカウントのパスワードを変更した後に **Directory Server** のレプリケーションに失敗する

Directory Server では、パスワード変更後に、レプリカ合意のパスワードキャッシュが適切に更新されません。そのため、レプリケーションマネージャーアカウントのパスワードを変更すると、レプリケーションが破損します。この問題を回避するには、Directory Server インスタンスを再起動します。その結果、キャッシュは起動時に再ビルドされ、レプリケーション接続は古いパスワードではなく新しいパスワードにバインドします。

(BZ#2101473)

389-ds-base パッケージの既知の問題

389-ds-base パッケージに影響する Red Hat Directory Server の既知の問題は、Red Hat Enterprise Linux 8.8 8.8 リリースノートに記載されています。

- NSS で有効になっている暗号の **default** キーワードは、他の暗号とは機能しない (BZ#1817505)

第5章 RED HAT DIRECTORY SERVER 11.6

Directory Server 11.6 に実装された新しいシステム要件、主な更新および新機能、既知の問題、および非推奨の機能について説明します。

5.1. 主な更新と新機能

このセクションでは、Directory Server 11.6 の新機能と重要な更新について説明します。

Directory Server がバージョン 1.4.3.31 にリベース

389-ds-base パッケージはアップストリームバージョン 1.4.3.31 にアップグレードされました。

LDAP ブラウザーへの完全対応

この機能拡張により、Web コンソールの **LDAP Browser** タブから LDAP エントリーを管理できます。たとえば、以下を行うことができます。

- ツリー ビューまたは テーブル ビューを使用してディレクトリーを参照します。
- ユーザー、グループ、組織単位 (OU)、カスタムエントリーなどのエントリーを管理します。
- アクセス制御命令 (ACI) を管理します。
- サービス定義 (CoS) のクラスを管理します。
- エントリーを検索します。

389-ds-base パッケージで強調表示された更新と新機能

389-ds-base パッケージに含まれている Red Hat Directory Server の機能は、Red Hat Enterprise Linux 8.7 リリースノートに記載されています。

- [Directory Server が Auto Membership プラグインタスクのキャンセルに対応](#)
- [ディレクトリーサーバーが **ldapdelete** 使用時の再帰的な削除操作に対応](#)
- [ディレクトリーサーバーインストール時における基本的な複製オプションの設定に対応](#)
- [ディレクトリーサーバーでレプリケーション変更ログのトリミングがデフォルトで有効化](#)

5.2. 既知の問題

このセクションでは、Directory Server 11.6 の既知の問題と、該当する場合の回避法について説明します。

Web コンソールのウィンドウ外部で変更された **Directory Server** の設定が自動的に表示されない

Red Hat Enterprise Linux 8 Web コンソールの Directory Server モジュールの設計により、ユーザーがコンソールのウィンドウの外部で設定を変更しても、Web コンソールには自動的に最新の設定が表示されません。たとえば、Web コンソールが開いている間にコマンドラインを使用して設定を変更すると、Web コンソールで新しい設定が自動的に更新されません。これは、別のコンピューターの Web コンソールを使用して設定を変更する場合でも当てはまります。この問題を回避するには、コンソールのウィンドウ外部で設定が変更された場合は、ブラウザーで Web コンソールを手動で更新します。

(BZ#1654281)

Directory Server で接尾辞の **referral** の設定に失敗する。

Directory Server でバックエンド参照を設定すると、**dsconf <instance_name> backend suffix set --state referral** コマンドを使用したバックエンドの状態設定に失敗し、次のエラーが表示されます。

```
Error: 103 - 9 - 53 - Server is unwilling to perform - [] - need to set nsslapd-referral before moving to referral state
```

これにより、接尾辞の参照の設定に失敗します。この問題を回避するには、以下のコマンドを実行します。

1. **nsslapd-referral** パラメーターを手動で設定します。

```
# ldapmodify -D "cn=Directory Manager" -W -H ldap://server.example.com

dn: cn=dc\3Dexample\2Cdc\3Dcom,cn=mapping tree,cn=config
changetype: modify
add: nsslapd-referral
nsslapd-referral: ldap://remote_server:389/dc=example,dc=com
```

2. バックエンド状態を設定します。

```
# dsconf <instance_name> backend suffix set --state referral
```

その結果、回避策により、接尾辞の参照を設定できます。

(BZ#2063140)

レプリケーションマネージャーアカウントのパスワードを変更した後に **Directory Server** のレプリケーションに失敗する

Directory Server では、パスワード変更後に、レプリカ合意のパスワードキャッシュが適切に更新されません。そのため、レプリケーションマネージャーアカウントのパスワードを変更すると、レプリケーションが破損します。この問題を回避するには、Directory Server インスタンスを再起動します。その結果、キャッシュは起動時に再ビルドされ、レプリケーション接続は古いパスワードではなく新しいパスワードにバインドします。

(BZ#2101473)

389-ds-base パッケージの既知の問題

389-ds-base パッケージに含まれている Red Hat Directory Server の既知の問題は、Red Hat Enterprise Linux 8.7 リリースノートに記載されています。

- NSS で有効になっている暗号の **default** キーワードは、他の暗号とは機能しない (BZ#1817505)

第6章 RED HAT DIRECTORY SERVER 11.5

6.1. 主な更新と新機能

このセクションでは、Directory Server 11.5 の新機能と重要な更新について説明します。

Directory Server がバージョン 1.4.3.28 にリベース

389-ds-base パッケージがアップストリームバージョン 1.4.3.28 にアップグレードされ、以前のバージョンに対するバグ修正や機能強化が数多く追加されました。

- レプリカで潜在的なデッドロックが修正されました。
- **dnalinterval** が **0** に設定されていると、サーバーが予想外に終了しなくなりました。
- 接続処理のパフォーマンスが改善されました。
- アクセス制御命令 (ACI) での **targetfilter** のパフォーマンスが改善されました。

389-ds-base パッケージで強調表示された更新と新機能

389-ds-base パッケージに含まれている Red Hat Directory Server の機能は、Red Hat Enterprise Linux 8.6 リリースノートに記載されています。

- Directory Server が、**tmpfs** ファイルシステムのデータベースのメモリーマッピングされたファイルを保存するようになる

6.2. テクノロジープレビュー

このセクションでは、Directory Server 11.5 でサポートされていないテクノロジープレビューについて説明します。

Directory Server Web コンソールは、テクノロジープレビューとして LDAP ブラウザーを提供します

LDAP ブラウザーが Directory Server Web コンソールに追加されました。Web コンソールの **LDAP Browser** タブを使用すると、次のことができます。

- ディレクトリーを参照する
- ユーザー、グループ、組織単位 (OU)、カスタムエントリーなどのエントリーを管理する
- ACI を管理する

Red Hat は、この機能をサポート対象外のテクノロジープレビューとして提供していることに注意してください。

389-ds-base パッケージのバグ修正

389-ds-base パッケージに含まれている Red Hat Directory Server のバグ修正は、Red Hat Enterprise Linux 8.6 リリースノートに記載されています。

- **PBKDF2** ハッシュパスワードを使用した **FIPS** モードの Directory Server への認証が期待どおりに機能するようになりました。

6.3. 既知の問題

このセクションでは、Directory Server 11.5 の既知の問題と、該当する場合の回避法について説明します。

Web コンソールのウィンドウ外部で変更された Directory Server の設定が自動的に表示されない

Red Hat Enterprise Linux 8 Web コンソールの Directory Server モジュールの設計により、ユーザーがコンソールのウィンドウの外部で設定を変更しても、Web コンソールには自動的に最新の設定が表示されません。たとえば、Web コンソールが開いている間にコマンドラインを使用して設定を変更すると、Web コンソールで新しい設定が自動的に更新されません。これは、別のコンピューターの Web コンソールを使用して設定を変更する場合でも当てはまります。この問題を回避するには、コンソールのウィンドウ外部で設定が変更された場合は、ブラウザで Web コンソールを手動で更新します。

Directory Server で接尾辞の referral の設定に失敗する。

Directory Server でバックエンド参照を設定すると、**dsconf <instance_name> backend suffix set --state referral** コマンドを使用したバックエンドの状態設定に失敗し、次のエラーが表示されます。

```
Error: 103 - 9 - 53 - Server is unwilling to perform - [] - need to set nsslapd-referral before moving to referral state
```

これにより、接尾辞の参照の設定に失敗します。この問題を回避するには、以下のコマンドを実行します。

1. **nsslapd-referral** パラメーターを手動で設定します。

```
# ldapmodify -D "cn=Directory Manager" -W -H ldap://server.example.com
dn: cn=dc\3Dexample\2Cdc\3Dcom,cn=mapping tree,cn=config
changetype: modify
add: nsslapd-referral
nsslapd-referral: ldap://remote_server:389/dc=example,dc=com
```

2. バックエンド状態を設定します。

```
# dsconf <instance_name> backend suffix set --state referral
```

その結果、回避策により、接尾辞の参照を設定できます。

レプリケーションマネージャーアカウントのパスワードを変更した後に Directory Server のレプリケーションに失敗する

Directory Server では、パスワード変更後に、レプリカ合意のパスワードキャッシュが適切に更新されません。そのため、レプリケーションマネージャーアカウントのパスワードを変更すると、レプリケーションが破損します。この問題を回避するには、Directory Server インスタンスを再起動します。その結果、キャッシュは起動時に再ビルドされ、レプリケーション接続は古いパスワードではなく新しいパスワードにバインドします。

389-ds-base パッケージの既知の問題

389-ds-base パッケージに含まれている Red Hat Directory Server の既知の問題は、Red Hat Enterprise Linux 8.6 リリースノートに記載されています。

- NSS で有効になっている暗号の **default** キーワードは、他の暗号とは機能しない

第7章 RED HAT DIRECTORY SERVER 11.4

7.1. 主な更新と新機能

このセクションでは、Directory Server 11.4 の新機能と重要な更新について説明します。

Directory Server がバージョン 1.4.3.27 にリベース

389-ds-base パッケージがアップストリームバージョン 1.4.3.27 にアップグレードされ、以前のバージョンに対するバグ修正や機能強化が数多く追加されました。主な変更点の一覧については、更新前にアップストリームのリリースノートを参照してください。

- <https://directory.fedoraproject.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-24.html>
- <https://directory.fedoraproject.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-23.html>
- <https://directory.fedoraproject.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-22.html>
- <https://directory.fedoraproject.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-21.html>
- <https://directory.fedoraproject.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-20.html>
- <https://directory.fedoraproject.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-19.html>
- <https://directory.fedoraproject.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-18.html>
- <https://directory.fedoraproject.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-17.html>

389-ds-base パッケージで強調表示された更新と新機能

389-ds-base パッケージに含まれている Red Hat Directory Server の機能は、Red Hat Enterprise Linux 8.5 リリースノートに記載されています。

- Directory Server が一時パスワードに対応
- Directory Server で **entryUUID** 属性のサポート
- **dnainTerval** 設定属性のサポート
- Directory Server は、レトロチェンジログデータベースから属性と接尾辞を除外できます。
- Directory Server は、ロックの枯渇によって生じるデータベースの破損を防ぐ監視設定を提供します。
- **nssslPersonalitySSL** の設定に役立つ新しいメッセージの追加

7.2. バグ修正

このセクションでは、Directory Server 11.4 で修正された、ユーザーに重大な影響を与えるバグについて説明します。

LDAPS URL の使用時に **dsconf** ユーティリティーが失敗しなくなりました

以前は、**dsconf** ユーティリティーはリモート接続の TLS 設定を正しく解決しませんでした。その結果、証明書の設定が正しい場合でも、リモート LDAPS URL で **dsconf** を使用すると、**certificate verify failed** エラーで失敗しました。**dsconf** 接続コードが修正されました。そのため、**dsconf** でリモート LDAPS URL を使用すると、期待どおりに動作するようになりました。

389-ds-base パッケージのバグ修正

389-ds-base パッケージに含まれている Red Hat Directory Server のバグ修正は、Red Hat Enterprise Linux 8.5 リリースノートに記載されています。

- プラグインで作成したデータベースのインデックスが有効になる
- レプリケーションセッションの更新速度の強化

7.3. 既知の問題

このセクションでは、Directory Server 11.4 の既知の問題と、該当する場合の回避法について説明します。

Web コンソールのウィンドウ外部で変更された Directory Server の設定が自動的に表示されない

Red Hat Enterprise Linux 8 Web コンソールの Directory Server モジュールの設計により、ユーザーがコンソールのウィンドウの外部で設定を変更しても、Web コンソールには自動的に最新の設定が表示されません。たとえば、Web コンソールが開いている間にコマンドラインを使用して設定を変更すると、Web コンソールで新しい設定が自動的に更新されません。これは、別のコンピューターの Web コンソールを使用して設定を変更する場合でも当てはまります。この問題を回避するには、コンソールのウィンドウ外部で設定が変更された場合は、ブラウザで Web コンソールを手動で更新します。

Directory Server Web コンソールでは LDAP ブラウザーが提供されない

Web コンソールを使用すると、管理者は Directory Server 11 インスタンスを管理および設定できます。ただし、統合 LDAP ブラウザーは提供されません。Directory Server でユーザーおよびグループを管理するには、**dsidm** ユーティリティを使用します。ディレクトリーエントリーを表示および変更するには、サードパーティーの LDAP ブラウザー、または **openldap-clients** パッケージが提供する OpenLDAP クライアントユーティリティを使用します。

389-ds-base パッケージの既知の問題

389-ds-base パッケージに含まれている Red Hat Directory Server の既知の問題は、Red Hat Enterprise Linux 8.5 リリースノートに記載されています。

- NSS で有効になっている暗号の **default** キーワードは、他の暗号とは機能しない

第8章 RED HAT DIRECTORY SERVER 11.3

8.1. 主な更新と新機能

このセクションでは、Directory Server 11.3 の新機能と重要な更新について説明します。

Directory Server がバージョン 1.4.3.16 にリベースされました。

389-ds-base パッケージがアップストリームバージョン 1.4.3.16 にアップグレードされ、以前のバージョンに対するバグ修正や機能強化が数多く追加されました。主な変更点のリストは、更新前にアップストリームのリリースノートを参照してください。

- <https://www.port389.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-16.html>
- <https://www.port389.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-15.html>
- <https://www.port389.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-14.html>
- <https://www.port389.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-13.html>
- <https://www.port389.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-12.html>
- <https://www.port389.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-11.html>
- <https://www.port389.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-10.html>
- <https://www.port389.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-9.html>

389-ds-base パッケージで強調表示された更新と新機能

389-ds-base パッケージに含まれている Red Hat Directory Server の機能は、Red Hat Enterprise Linux 8.4 リリースノートに記載されています。

- Directory Server が、インデックス化されていない内部検索を拒否するようになりました。
- Directory Server はレプリケーションアグリーメントブートストラップクレデンシャルの設定をサポート
- dsidm ユーティリティーはエントリーの名前変更と移動をサポート
- Directory Server は **RESULT** エントリーで作業および操作時間を記録
- スループットを向上させるために、**nsslapd-nagle** のデフォルト値がオフになっている

8.2. バグ修正

このセクションでは、Directory Server 11.3 で修正された、ユーザーに重大な影響を与えるバグについて説明します。

lib389 ライブラリーが、**Account** オブジェクトで検出されたエントリーの削除に失敗しなくなりました。

以前は、**lib389** ライブラリーの **Account** オブジェクトの **_protected** フラグが有効化されていました。そのため、**delete** 操作に失敗していました。今回の更新により、フラグが **False** に設定されるようになりました。その結果、**Account** オブジェクトによって検出されたエントリーを削除したり、名前を変更したりしても、ライブラリーが失敗しなくなりました。

389-ds-base パッケージのバグ修正

389-ds-base パッケージに含まれている Red Hat Directory Server のバグ修正は、Red Hat Enterprise Linux 8.4 リリースノートに記載されています。

- [証明書ベースの認証でのレプリケーションアグリーメントの作成が想定どおりに動作](#)

8.3. 既知の問題

このセクションでは、Directory Server 11.3 の既知の問題と、該当する場合の回避法について説明します。

Web コンソールのウィンドウ外部で変更された **Directory Server** の設定が自動的に表示されない

Red Hat Enterprise Linux 8 Web コンソールの Directory Server モジュールの設計により、ユーザーがコンソールのウィンドウの外部で設定を変更しても、Web コンソールには自動的に最新の設定が表示されません。たとえば、Web コンソールが開いている間にコマンドラインを使用して設定を変更すると、Web コンソールで新しい設定が自動的に更新されません。これは、別のコンピューターの Web コンソールを使用して設定を変更する場合でも当てはまります。この問題を回避するには、コンソールのウィンドウ外部で設定が変更された場合は、ブラウザで Web コンソールを手動で更新します。

Directory Server Web コンソールでは **LDAP** ブラウザーが提供されない

Web コンソールを使用すると、管理者は Directory Server 11 インスタンスを管理および設定できます。ただし、統合 LDAP ブラウザーは提供されません。Directory Server でユーザーおよびグループを管理するには、**dsidm** コーティリティーを使用します。ディレクトリーエントリーを表示および変更するには、サードパーティーの LDAP ブラウザー、または **openldap-clients** パッケージが提供する OpenLDAP クライアントユーティリティーを使用します。

第9章 RED HAT DIRECTORY SERVER 11.2

9.1. 主な更新と新機能

このセクションでは、Directory Server 11.2 の新機能と重要な更新について説明します。

Directory Server がバージョン 1.4.3.8 にリベース

389-ds-base パッケージがアップストリームバージョン 1.4.3.8 にアップグレードされ、以前のバージョンに対するバグ修正や機能強化が数多く追加されました。主な変更点の一覧については、更新前にアップストリームのリリースノートを参照してください。

- <https://www.port389.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-8.html>
- <https://www.port389.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-7.html>
- <https://www.port389.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-6.html>
- <https://www.port389.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-5.html>
- <https://www.port389.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-4.html>
- <https://www.port389.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-3.html>
- <https://www.port389.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-2.html>
- <https://www.port389.org/docs/389ds/releases/release-1-4-3-1.html>

389-ds-base パッケージで強調表示された更新と新機能

389-ds-base パッケージに含まれている Red Hat Directory Server の機能は、Red Hat Enterprise Linux 8.3 リリースノートに記載されています。

- Directory Server は、サービスの起動時にプライベートキーと証明書をプライベート名前空間にエクスポートします。
- Directory Server での `pwdReset` 操作属性のサポート
- ディスクの監視のしきい値に達すると、Directory Server がインスタンスの読み取り専用モードに切り替わるようになりました。
- Directory Server は RESULT エントリで作業および操作時間を記録

9.2. バグ修正

このセクションでは、Directory Server 11.2 で修正された、ユーザーに重大な影響を与えるバグについて説明します。

389-ds-base パッケージのバグ修正

389-ds-base パッケージに含まれている Red Hat Directory Server のバグ修正は、Red Hat Enterprise Linux 8.3 リリースノートに記載されています。

- 間接的な CoS 定義を使用時の、Directory Server でのメモリーリークを修正

9.3. 既知の問題

このセクションでは、Directory Server 11.2 の既知の問題と、該当する場合の回避法について説明します。

Web コンソールのウィンドウ外部で変更された **Directory Server** の設定が自動的に表示されない

Red Hat Enterprise Linux 8 Web コンソールの Directory Server モジュールの設計により、ユーザーがコンソールのウィンドウの外部で設定を変更しても、Web コンソールには自動的に最新の設定が表示されません。たとえば、Web コンソールが開いている間にコマンドラインを使用して設定を変更すると、Web コンソールで新しい設定が自動的に更新されません。これは、別のコンピューターの Web コンソールを使用して設定を変更する場合でも当てはまります。この問題を回避するには、コンソールのウィンドウ外部で設定が変更された場合は、ブラウザで Web コンソールを手動で更新します。

Directory Server Web コンソールでは **LDAP** ブラウザーが提供されない

Web コンソールを使用すると、管理者は Directory Server 11 インスタンスを管理および設定できます。ただし、統合 LDAP ブラウザーは提供されません。Directory Server でユーザーおよびグループを管理するには、**dsidm** ユーティリティを使用します。ディレクトリーエントリーを表示および変更するには、サードパーティーの LDAP ブラウザー、または **openldap-clients** パッケージが提供する OpenLDAP クライアントユーティリティを使用します。

第10章 RED HAT DIRECTORY SERVER 11.1

10.1. 主な更新と新機能

このセクションでは、Directory Server 11.1 の新機能と重要な更新について説明します。

Directory Server がバージョン 1.4.2.4 にリベースされました。

389-ds-base パッケージがアップストリームバージョン 1.4.2.4 にアップグレードされ、以前のバージョンに対するバグ修正および機能拡張が数多く追加されました。主な変更点のリストは、更新前にアップストリームのリリースノートを参照してください。

- <https://directory.fedoraproject.org/docs/389ds/releases/release-1-4-2-4.html>
- <https://directory.fedoraproject.org/docs/389ds/releases/release-1-4-2-3.html>
- <https://directory.fedoraproject.org/docs/389ds/releases/release-1-4-2-2.html>
- <https://directory.fedoraproject.org/docs/389ds/releases/release-1-4-2-1.html>

Directory Server にヘルスチェック機能が追加

この改良により、Directory Server にヘルスチェック機能が追加されます。**dsctl healthcheck** コマンドは、Directory Server インスタンスで読み取り専用の操作を実行し、たとえば、インスタンスが正しく設定されている場合や、レプリカ合意が正しく機能している場合などです。

389-ds-base パッケージで強調表示された更新と新機能

389-ds-base パッケージに含まれている Red Hat Directory Server の機能は、Red Hat Enterprise Linux 8.2 リリースノートに記載されています。

- Directory Server で一部のレガシースクリプトが置き換えられる
- Directory Server が、システム全体の暗号化ポリシーに基づいて `sslVersionMin` パラメーターを設定する

10.2. バグ修正

このセクションでは、Directory Server 11.1 で修正された、ユーザーに重大な影響を与えるバグについて説明します。

389-ds-base パッケージのバグ修正

389-ds-base パッケージに含まれる Red Hat Directory Server のバグ修正は、Red Hat Enterprise Linux 8.2 リリースノートに記載されています。

- Directory Server インスタンス名が、最大 103 文字になる
- `dsctl` ユーティリティーが、名前にハイフンが付いたインスタンスの管理に失敗しなくなる

10.3. 既知の問題

このセクションでは、Directory Server 11.1 の既知の問題と、該当する場合の回避法について説明します。

Web コンソールのウィンドウ外部で変更された **Directory Server** の設定が自動的に表示されない

Red Hat Enterprise Linux 8 Web コンソールの Directory Server モジュールの設計により、ユーザーが

コンソールのウィンドウの外部で設定を変更しても、Web コンソールには自動的に最新の設定が表示されません。たとえば、Web コンソールが開いている間にコマンドラインを使用して設定を変更すると、Web コンソールで新しい設定が自動的に更新されません。これは、別のコンピューターの Web コンソールを使用して設定を変更する場合でも当てはまります。この問題を回避するには、コンソールのウィンドウ外部で設定が変更された場合は、ブラウザで Web コンソールを手動で更新します。

Directory Server Web コンソールでは LDAP ブラウザーが提供されない

Web コンソールを使用すると、管理者は Directory Server 11 インスタンスを管理および設定できます。ただし、統合 LDAP ブラウザーは提供されません。Directory Server でユーザーおよびグループを管理するには、**dsidm** ユーティリティを使用します。ディレクトリーエントリーを表示および変更するには、サードパーティーの LDAP ブラウザー、または **openldap-clients** パッケージが提供する OpenLDAP クライアントユーティリティを使用します。

389-ds-base パッケージの既知の問題

389-ds-base パッケージに含まれている Red Hat Directory Server の既知の問題は、Red Hat Enterprise Linux 8.2 リリースノートに記載されています。

- Directory Server が、検索フィルターで使用されている属性がスキーマに欠如している場合に警告する

10.4. 削除された機能

このセクションでは、Directory Server 11.1 から削除された機能について説明します。

nunc-stans フレームワークの削除

nunc-stans フレームワークが Directory Server から削除されました。サーバーは、Directory Server で改善されたコア接続処理メカニズムを使用するようになりました。

以前にフレームワークを手動で有効にした場合は、Directory Server は次の警告をログに記録します。

```
WARN - slapd_daemon - cn=config: nsslapd-enable-nunc-stans is on. nunc-stans has been
depreciated and this flag is now ignored.
WARN - slapd_daemon - cn=config: nsslapd-enable-nunc-stans should be set to off or deleted from
cn=config.
```

Directory Server がこの警告をログに記録しないようにするには、**cn=config** エントリーから **nsslapd-enable-nunc-stans** を削除します。

```
$ ldapmodify -D "cn=Directory Manager" -W -p 389 -h server.example.com -x
dn: cn=config
changetype: modify
delete: nsslapd-enable-nunc-stans
```

第11章 RED HAT DIRECTORY SERVER 11.0

11.1. 主な更新と新機能

このセクションでは、Directory Server 11.0 の新機能と重要な更新について説明します。

インスタンスを管理するための新しいコマンドラインユーティリティーの導入
Red Hat Directory Server 11.0 では、**dscreate** ユーティリティー、**dsconf** ユーティリティー、および **dsctl** ユーティリティーが追加されました。これらのユーティリティーは、コマンドラインを使用して Directory Server の管理を簡素化します。たとえば、複雑な LDIF ステートメントをサーバーに送信する代わりに、パラメーターとコマンドを使用して機能を設定できるようになりました。

次に、各ユーティリティーの目的の概要を示します。

- **dscreate** ユーティリティーを使用して、インタラクティブモードまたは INF ファイルを使用して新しい Directory Server インスタンスを作成します。INF ファイル形式は、インストーラーがこれまでのバージョンの Directory Server で使用していた形式とは異なることに注意してください。
- **dsconf** ユーティリティーを使用して、ランタイム時に Directory Server インスタンスを管理します。たとえば、**dsconf** を使用して以下を行います。
 - **cn=config** エントリーの設定
 - プラグインの設定
 - レプリケーションの設定
 - インスタンスのバックアップと復元
- **dsctl** ユーティリティーを使用してオフライン時に Directory Server インスタンスを管理します。たとえば、**dsctl** を使用して以下を行います。
 - インスタンスの起動と停止
 - サーバーデータベースの再インデックス化
 - インスタンスのバックアップと復元

これらのユーティリティーは、Directory Server 10 で非推奨となった Perl スクリプトとシェルスクリプトに代わるものです。このスクリプトは、サポート対象外の **389-ds-base-legacy-tools** パッケージで引き続き利用できますが、Red Hat は、新しいユーティリティーを使用した Directory Server の管理のみをサポートします。

LDIF ステートメントを使用した Directory Server の設定は引き続きサポートされますが、Red Hat はユーティリティーの使用を推奨します。

ユーティリティーの使用方法は、[Red Hat Directory Server 11 ドキュメント](#) を参照してください。

Directory Server によるブラウザーベースのユーザーインターフェースの提供

この改良により、これまでのバージョンで使用された Java ベースのコンソールに代わるブラウザーベースのインターフェースが Red Hat Directory Server に追加されます。そのため、管理者は Red Hat Enterprise Linux Web コンソールを使用して、ブラウザーを使用した Directory Server インスタンスの管理を行えるようになりました。

詳細は、[Red Hat Directory Server 11 ドキュメント](#) を参照してください。

ブラウザベースのユーザーインターフェイスには LDAP ブラウザーが含まれていないことに注意してください。

nsslapd-unhashed-pw-switch パラメーターのデフォルト値が **off** になりました。

たとえば、パスワードを Active Directory (AD) と同期する場合、Directory Server プラグインは暗号化されていないパスワードをハードディスクに保存する必要があります。**nsslapd-unhashed-pw-switch** 設定パラメーターは、Directory Server が暗号化されていないパスワードを保存するかどうかと方法を決定します。暗号化されていないパスワードを保存するためにプラグインを必要としないシナリオでセキュリティを強化するために、**nsslapd-unhashed-pw-switch** パラメーターのデフォルト値は、Directory Server 11.0 で **on** から **off** に変更になりました。

AD とパスワード同期を設定する場合は、Windows 同期合意が設定された Directory Server インスタンスで **nsslapd-unhashed-pw-switch** を手動で有効にします。

```
# dsconf -D "cn=Directory Manager" ldap://server.example.com config replace nsslapd-unhashed-pw-switch=on
```

389-ds-base パッケージで強調表示された更新と新機能

389-ds-base パッケージに含まれている Red Hat Directory Server の機能は、Red Hat Enterprise Linux 8.1 リリースノートに記載されています。

- [Directory Server で新しいパスワード構文の確認](#)
- [Directory Server が提供する内部操作ログへの対応が改善](#)

11.2. 既知の問題

このセクションでは、Directory Server 11.0 の既知の問題と、該当する場合の回避法について説明します。

Web コンソールのウィンドウ外部で変更された **Directory Server** の設定が自動的に表示されない

Red Hat Enterprise Linux 8 Web コンソールの Directory Server モジュールの設計により、ユーザーがコンソールのウィンドウの外部で設定を変更しても、Web コンソールには自動的に最新の設定が表示されません。たとえば、Web コンソールが開いている間にコマンドラインを使用して設定を変更すると、Web コンソールで新しい設定が自動的に更新されません。これは、別のコンピューターの Web コンソールを使用して設定を変更する場合でも当てはまります。この問題を回避するには、コンソールのウィンドウ外部で設定が変更された場合は、ブラウザで Web コンソールを手動で更新します。

Directory Server Web コンソールでは **LDAP** ブラウザーが提供されない

Web コンソールを使用すると、管理者は Directory Server 11 インスタンスを管理および設定できます。ただし、統合 LDAP ブラウザーは提供されません。Directory Server でユーザーおよびグループを管理するには、**dsidm** ユーティリティを使用します。ディレクトリーエントリーを表示および変更するには、サードパーティーの LDAP ブラウザー、または **openldap-clients** パッケージが提供する OpenLDAP クライアントユーティリティを使用します。